キリスト教科目の新しい展開

―2004年度全カリ総合B群「信じること，生きること」の経験から―

香山　洋人

1. はじめに

2000年から4年にわたり，私は全カリ総合B「日本社会と民族差別」のコーディネーターを経験させていただいた。コーディネーターの役割は「講義」を行うことではなく授業全体のまさにコーディネーションだが，主題を定めてから実際のプログラムを組み立てていく準備の大変さは一般の講義とは異なっている。しかし，複数のスタッフで作り上げることの面白さ，学生からのリアクションとそれへの応答といったダイナミックなやり取りは総合Bならではであり，緊張の連続であると同時に驚きと収穫の多い，かけがえのない体験であった。私は，学生たちが講師たちの語りかけを実に深く受け止め，また必死に応答しようとする姿に接して感動もし，勇気を与えられた。チャプレンの私にとって，それまでチャペルやキャンプなどで接するのとは違った学生の姿に接したことは実に貴重であり有意義な経験だった。

こうした経験が与えられていなければ，これからご紹介する授業，「信じること，生きること」は生まれなかっただろう。以下にその概略を述べ全カリ総合Bの今後の可能性について考えてみたい。

2. 2004年度全カリ総合B「信じること，生きること」

「信じること，生きること」は2004年度からスタートした。授業は西原廉太（文学部キリスト教学科），香山洋人（チャプレン）がコーディネーターとなり，柳時京（ユ・シギョン），八木正言，上田亜樹子の各チャプレンも毎時間出席し，大学院生の安倍愛樹をティーチングアシスタントに，7人の単発講師を外部から招いて行われた。以下その概要を簡単にご紹介する。

【第一回】はオリエンテーション。授業の狙いと担当者の想いを紹介した。
【第二回】柳時京，八木正言両チャプレンが発題。キリスト教との出会い，聖職者を志したきっかけなどを語った。立教卒である八木チャプレンの話は身近であり，一方韓国の民主化や軍隊生活など柳チャプレンの発題は同じ

時代を生きながらまったく異なる世界があることを明らかにした。

【第三回】「セクシャルマイノリティーとして生きる」を主題に平良愛香氏を講師に招いた。男と女だけに二分不可能なセクシャリティーの多様性と，ご自身の歩みとそこから獲得した三重のアイデンティティー（沖縄人・同性愛者・キリスト者）について，平良氏は思い切った打ち明けばなしをも含みながら語り学生を引き付けた。

【第四回】「聖職者として生きる」と題してカトリック司教である森一弘氏を講師に招いた。森司教はカトリック教会の高位聖職者であり修道者だ。キリスト教への反発，神父としての挫折や苦悩，上司の反対を押し切って作り上げた自分なりの働き方など，半生を振り返りながらの語りとなった。「私の神はブッシュの神ではない」という発言は学生の印象に残ったようだ。

【第五回】「ジェンダーを超えて生きる」と題して上田亜樹子チャプレンが語った。家族からの虐待，教会内の差別，苦悩そして解放，あまりに赤裸々な告白に，一瞬教室内の時間が止まるような場面があった。「担いきれない重荷は担わなくてもいい，神が代わりに担ってくれる。そして担える準備が整った時，それと正面から向き合えばいい」という言葉に多くの学生が感銘を受けた。

【第六回】これまでの内容をもとにコーディネーターが振り返りのディスカッションを行った。毎回のリアクションから，学生たちにキリスト教についての基本的な知識が不足していることを感じ，簡単な解説なども加えた。

【七回目】「こどもたちと共に」と題し，しょうがい児教育の現場で働く早川成氏を招いた。牧師の息子としての教会への反発，しょうがいを持つ子どもたちとその親たちとの出会い，福祉への疑問など，平易な語り口の中に将来の職業選択に悩む学生へのメッセージもこめられていた。

【八回目】「野宿労働者と共に」と題し，名古屋の笹島でホームレスの支援活動を行う松本普氏を招き，スライドを交えて路上生活の現状をうかがった。松本氏への共感と同時に，見えない解決策への戸惑いが多く寄せられた。

【九回目】「滞日外国人と共に」と題して，聖公会をベースに電話相談など外国人労働者の支援活動を行う佐々木紀久江氏，森田エイプリル氏を招き，特に日本人配偶者による暴力や子どもの教育，法的な壁など，日本で暮らす外国人の現状について現場の活動から語っていただいた。

【十回目】「在日外国人として」と題し，在日コリアンで多文化共生保育を実践する尹卿恵（ユン・ギョンヘ）氏を招き，自らの生い立ちも含めマイノリティーとしての自己確立の問題などが語られた。絵本を読み，朝鮮の遊びを教える尹氏を前に童心を取り戻した学生たちに，マイノリティーだけでない自

分自身の自己覚知の課題が染み渡った。

【十一回目】「多民族多文化共生社会を目指して」と題し，金迅野（キム・シニャ）氏を進行役に在日コリアンの大学生によるラップとトークが披露された。大学の講義室でラップを聴き同世代の若者の熱いメッセージに触れたことは，受講者に特別の印象を残した。これらのプログラムのあと，最終的にコーディネーターとチャプレンが全体を振り返っての発題を行い，授業を締めくくった。

3. 授業の狙い

この授業はチャプレン室の提案によるものだ。立教大学の授業にチャプレンが関わらなくなって久しいが，「信じること，生きること」はチャプレンが企画し，準備と運営に責任を持ち，教室で語る試みとして，立教においては歴史的な意味を持つものかもしれない。我々はこの授業のキーワードに「生きる」を選んだ。それは，信仰というものは最終的には「人間の生き方」として結実するものであり，どこで誰とどのように生きるかという決断にキリスト教のメッセージそのものがあらわれていると考えたからだ。したがって授業ではだれも，信じることについて語ることをしなかった。キリスト者として具体的な現場で生きている一人一人が示す自らの姿そのものが，すなわち「信じて生きる」ことをもっとも雄弁に語ると考えたからだ。

講師はみなキリスト教の信仰，あるいは価値観を背景に現代社会の様々な現場で活躍する人々だ。その現場は，社会のひずみや痛みを象徴する場であり，キリスト教が常に関心を寄せてきた人間の弱さと痛みの現場だ。授業ではそうした現場で働く人々を英雄のように賞賛したり，良い生き方の見本として提示したかったのではない。ただ人生の先輩である語り手たちが，一人一人の悩みや決断，生きることのエネルギー，そして希望を，「信じること」とどのように関連させて生きてきたのかを伝え，学生たちに自分なりの応答をして欲しかったのだった。

4. 学生たちの反応

この授業は，たとえば中高時代にミッションスクールで経験してきた聖書の授業とも，「キリスト教概論」のような授業とも異なっているはずだ。また知識を体系的に伝達する一般的な授業とも異なっていたため，学生たちがどのように受け止めてくれるか，企画者たちは心配だった。しかし学生自身，自らの体験を下敷きにしていろいろな角度からメッセージを受け止めてくれたことは確かだった。リアクションペーパーに綴られた言葉の中から学生たちの声の一部を紹介する。

・「私は1年のころからキリスト教について色々学んできましたが，先生

自身の神のとらえ方や経験について聞いたことがありませんでした。だからこの授業で様々な先生の実際の体験を学ぶことが楽しいです」（キリ科２年）。

・「チャプレンというといつも教会にいて私など近づくことのできない存在と思っていました。しかしこの講義を聞いて身近に感じることができました」（産関２年）。

・「私はキリスト教になる人は弱い人だと思っていました。辛い事があるとすぐ神に頼るというイメージが。でもチャプレンの話しを聞いてみると逆に辛い状況にいる人を助けたい，接したいと思っていることがわかりました」（現代文化１年）。

・「真面目なクリスチャンの友人は私の生き方を見て神の意に反していると怒るけど，先生の話しを聞いて勇気付けられました。多分信仰というものは人を縛るのではなく自由にするものだと思います」（キリ科２年）。

学生の中に作られていたキリスト教やチャプレンに対する既成のイメージが変わっていくことは大きな収穫だ。我々は「キリスト教とはこういう教えだ」と語ることをしなかったが，学生たちの中にはキリスト教そのものの本質に向き合おうとしている者もいたようだ。

・「キリスト教は信者でない自分にも救いとなる宗教なのだと感じました。自分のアイデンティティーについてもう一度考えてみたいと思います」（英米４年）。

・「私はキリストを信じたことはありません。しかし今日の話しを聞いて，キリストを信じることは愛されていることを自覚することだという言葉に共感しました」（観光４年）。

・「キリスト教というのは，僕が思うに，昔はどうであれ今信じている人のものなのだと思いました」（経済３年）。

信じて生きてきた出来事が物語として直接語りかけられることで，学生たちは今まで感じられなかった何かに出会ったようだ。そして講師たちの生き方，語りかけが新しい世界を切り開いたことも事実のようだ。

・「特に同性愛の問題が現実として私の前に現れたことで今までの思いが変わってきた。この短時間で理解できたとは思わないが，私の考えに変化を与える時間となった。私なりの『出会い』の大きな一つになったことは間違いない」（産関１年）。

・「すごい人の話しを聞けた。自分自身に問いかけてみよう。もっともっと。アイデンティティーについて」（産関１年）。

・「『人間は弱く耐え切れなく逃げて

しまう。しかし逃げた分だけつけは回って来る」「自分らしく生きていくことに希望を失わない」という上田チャプレンの言葉一つ一つに重みがありました。先生の人生には衝撃を受けましたが，先生はそれを実際に体験してきたのだから本当にすごいと思います」(法3年)。

・「先生の話は，うまく説明できませんが今の自分にとって貴重なものとなりました。本当にうまく説明できないのが申し訳ないです。ただ今の自分の背中の重荷が少し軽くなった気がするのは確かです」(教育3年)。

授業の形式がもたらすインパクトもあった。

・「普段めったに聞くことのできない先生同士のディスカッションを聞くことができた。それぞれこの授業に対する熱い思いがあり，自分の今の考えと比較したりもした。今まで色々なゲストの方々の講義を聞いたがその中で共通していたのは「昔は想像もつかなかった自分が今はここにいる」ということだろう。今まで神秘的としか思っていなかったキリスト教の日常性に触れ，改めて驚いている。そもそもキリスト教に関わる自分は，高校までは想像もつかない姿だった」(仏文1年)。

・「ラップで思いを伝えることは単に言葉で伝えるより心に響く。こういう授業を受けたのは初めてだったけど，とても新鮮でずっと心に残る。自分と同じ年代とは思えないほど考えや思いがしっかりしていてすごい」(現文1年)。

この授業は結論を伝達するのではなく，講師自らが問いと格闘する姿をさらけ出すことで問いを投げかけ，学生と共に答えを探し続ける経験を共有するものだった。

・「僕にとっては正直キリスト教もイスラム教もよくわからない。神を信じて救われるのなら信じたい。でも神を信じて幸福になれるとは思えない。そんな世の中は今も昔も変わっていないのかな。神を信じる人の話しを聞きたいのでこの授業は楽しい。でも謎は深まるばかりだ」(産関1年)。

・「私は今私をつくっている途中だという気がします。それに私という人間が無条件で愛される存在であるということを感じられる体験をしたり，感じられなくなったりの繰り返しです」(コミ福4年)。

・「今日のチャプレンたちの話しの中心はなぜ聖職者なのかということでしたが，今までの授業を通して先生方も常に悩み考えて聖職者として生きていることを知りました。人が生きることは常に自分探しの旅で，それは何かを信じていくことだと，今は感じています」(教育4年)

・「今日のチャプレンの話しを聞いて色々考えました。信じるということと生きるということ。自分の中に明確なつながりはありません。でも，つながる時とはどういう時なのか，今はなんとなく分かる気がします」（日文4年）

5. これからの課題，正課と正課外を架橋する試みに向かって

我々はこの授業で，正課におけるキリスト教教育の新しいスタイルを模索し，一定の手ごたえを得てきたと自負している。と同時に，我々にとって伝えるべき本当のメッセージは教室内で完結するのではなく，そこからどこに向かっていくのかという次の一歩にかかっていると思っている。授業の内容は毎回ホームページにまとめ，学生からのコメントもなるべく拾い上げるように努力はしてきたつもりだが，やはり大教室の授業は一方通行になりがちなのは事実だ。この授業を受けた学生がチャペルを訪れ，チャプレンの勉強会に加わり，キャンプに参加し，あるいは講師たちのいる現場を訪ねることがあるかもしれない。その時，「信じること，生きること」の更なる広がりと深まりが生まれるに違いない。「この授業が自分にとっての大事な出会いだ」とある学生はコメントしたが，チャプレンにとってこの授業は学生との出会いの初めの一歩であり，これからが本当の意味でのキリスト教教育の正念場だと思っている。

今後に向けた課題は多い。次回はゲスト講師ではなくチャプレン自身のプレゼンテーションを増やして，それぞれの専門性からじっくりと語りかけようと思っている。また，フィールドトリップや様々な現場での活動を取り入れた「正課と正課外」を往復する手法，他者への奉仕体験を含んだサーヴィスラーニング的手法などもあるだろう。いずれにしても，こうした取り組みを可能とするシステム，様々なアイディアを具体化する可能性が開かれているところに，立教の特色的教育である全カリ総合Bの強みがあるはずだ。我々はそのことを誇るべきだと思うし，さらに前進させていく責任を担っていると思う。

かやま　ひろと
（本学チャプレン）